

2025年度入試から新課程入試が始まります。大学関係者対象のアンケートでは、入試において最も重視している課題として、「新学習指導要領への対応」が最上位に挙がっています【図表14】。そこで、新課程入試に関する課題を掘り下げて整理してみます。

【課題1】新科目への対応

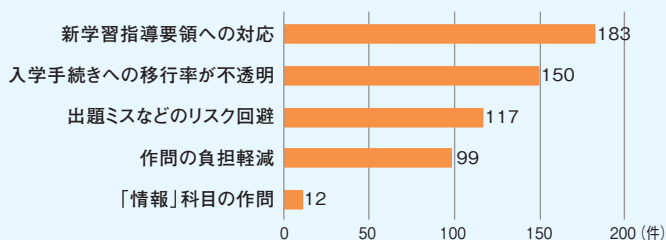
新課程移行後の一般選抜で、大学が頭を悩ませているのは歴史科目への対応です。前年に各大学から出された出題予告では、多くの大学が日本史・世界史という枠を外さず、「歴史総合の日本史部分」あるいは「歴史総合の世界史部分」の選択という形にしていたのですが、「こうした出題は歴史総合という科目の趣旨に反する」という指摘が文科省から入りました。そのため、出題範囲から歴史総合を外し、日本史探究、世界史探究へと変える大学も少なからずあります。歴史総合の作問は、日本史と世界史それぞれの担当者が一緒に問題を考える必要があり、こうした負担に耐えられる大学でないと作問が難しいからでしょう。また、私立でも個別試験で「情報」を出題する大学が見られます。これは、偏差値上位の大学に限った傾向ではなく、情報系の教員の希望によるケースが多いようです。

【課題2】旧課程生への対応

2025年度入試は既卒の旧課程生も受験します。新旧両課程の共通範囲から問題を考えるのは非常に難しく、一方で新課程色が強い問題にしてしまうと、旧課程生用に別問題をつくる必要があります。最も入試問題をつくりにくい年度と言えるでしょう。

現状、前年度の入試から極力変えずに済むギリギリのラインで調整する大学が多いようです。一方で、入試改

【図表14】入試において最も重視している課題



*「Between大学経営シンポジウム2024」参加者アンケート(2024年2月 n=794)

新しい科目の作問、教員負担増をどう乗り越える？ 新課程に対応した入試問題作成の課題

(株)進研アド
入試サポート事業本部
事業本部長

水谷 明功

みずたにあきのり ●2000年ベネッセコーポレーション入社、2011年北陸支社長。2014年から進研模試、GTEC、小論文等の採点に携わる。2024年より現職。



革をリードする大学は新課程入試初年度からしっかり「情報」を課すなど、二極化する傾向が見られます。

【課題3】つくり手、つくり方の問題

入試方式の複雑化や日程増、新課程対応などにより、作問担当教員の負担が増えているのに加えて、世代交代も問題になっています。ベテラン担当者が退職し、経験が浅い教員が作問にあたると、問題の内容や難易度が安定しません。作問を輪番制にする大学もありますが、数年に1度の作問のために担当教員が高校の教科書を読み込むのは容易ではなく、ノウハウも蓄積されません。マンパワーがある大規模大学は学部の個別試験を続けられますが、そうでない大学は全学部統一入試で対応せざるを得ません。そうなると、一般選抜で学部のAPを反映した入試を行うのは難しくなるため、募集人員数が少なく面接や小論文等が主の年内入試でAPを反映するという流れが見られます。

「選抜する」という意識を変える必要が

文科省が出す方針は設置区分別や入試難易度別ではありません。中堅の私立大学がそれに対応するにしても大学の負担が大きいうえに、受験対策ができる受験生も少ないでしょう。ある意味、二極化はしかたないことです。全入時代が本格化した今、「選抜する」という意識を変える必要があるのではないのでしょうか。入学後にリメディアル教育をするのであれば、その内容を入試問題にするのも方法の一つです。大学で学ばせたい内容について課題を出し、それに取り組んでもらう。そんな学習に向かわせるための機会としての入試があってもよいのではないのでしょうか。